

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第22号 (平成28年3月15日)

読者数：558名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

広島という街からのメッセージ

～広島建築と街づくり憲章～

広島大学工学部建築計画学准教授

岡河 貢



広島という街は一度70年前に消滅しました。それも人類が初めて使用した核兵器という究極の破壊のテクノロジーによる消滅でした。テクノロジーを発展させたことは人類の最も特筆すべき事柄であり、20世紀の文明がそれまでの人類の歴史と比較して独自の進歩をなしとげたのは、科学技術の恩恵が作り上げた人類が豊かに生活するための様々な生産物の大量の供給を可能にしたことにあります。

20世紀の科学技術の発展は、多くの人類にとって有益なものを多くの人々に与えるためにたくさんの工業製品を生産し、食料を増産し、高速交通により人や物が広範囲に移動することを可能にしました。しかしながら科学技術の進歩は20世紀初頭に物質の根源的な仕組みである原子レベルの問題に人類の知が到達してしまいました。このことは神の摂理の境界を越えてそれまでは神の領域としていた地平に人類の科学技術が到達した時代になったということです。このことは神に代わって人類が自ら生み出したテクノロジーによる世界の消滅の責任を取らなくてはならないという状況を迎えたということです。

核エネルギーの操作がその最も悲劇的な科学技術の発達であり、この技術を戦争の技術として実用化し、それが実行されたのが1945年8月6日の広島です。このとき人類史上最も凄惨な殺戮が核爆弾によってなされたのです。この破壊は人類が科学技術を獲得したという事柄に関する問題の根源として人類の責任なのです。人類はこの責任をどのように負えばよいのでしょうか、いまだに答えが出ないまま21世紀の現在さらなる核開発競争が地球上で繰り広げられ、いまだに核兵器廃絶は実現していないどころか、現在16,000発の核兵器が地球上に存在していると言われています。

しかしながら70年間は草木も生えないといわれた広島で被爆してもなお生き残った人々は、放射能の残るこの地でとにかく生きるために、まずは雨露しのぐだけのバラックの街を作り始めました。1940年代はとにかく生きるために広島の街は無我夢中で作られ始めました。戦争から生き残り広島に帰還した建築設計者たちが広島で何も無い中から、それでも未来に向けた建築を作ることをはじめました。それは戦後の自由な広島に建築の夢を見ることができたからです。何も無くなった広島でも建築によって生きられる街づくりの夢をみることができたからです。

1950年代になると広島は新しい日本が目指すべき平和を表現する街を作ることになります。広島には世界に平和を訴えつづけ、核兵器をもう二度と使わない世界にするという使命が共有されました。この頃に作られた丹下健三の広島平和記念公園や村野藤吾の広島平和記念聖堂は戦後モダニズムの傑作というだけでなく、広島という街のまちづくりがなんであるかということを示すものとして設計されています。



広島平和記念公園も広島平和記念聖堂も平和を永遠に祈念することが広島という街の機能であるということが、被爆した人々の慰霊のための建築というだけでなく設計意図の中に表現されているように思います。また被爆した原爆ドームが示しているのは核兵器の恐ろしさを未来永劫忘れてはいけないというメッセージであると思います。

つまり広島の街づくりとは、核兵器の恐ろしさを忘れてはならないという戒めと被爆者の犠牲の上に獲得した平和の尊さの表現であり、広島の街の生活は平和の日常がそこに繰り広げられていることであり、それが広島で建築を作り、街を作るということであることを示しているのです。私はこれからの広島の街づくりはこのことから受け継ぐ2つのことが大切だと考えます。

一つは、原爆ドームと同じ歴史的価値のある被爆建物である旧陸軍被服支廠などのまだ現存している被爆建物をもっとこれからの未来の平和都市広島の街づくりのためにしっかりと位置付け活用し、それを世界の平和のためのメッセージとして活用するという事です。これらの被爆建物は広島が原爆の廃墟から復興してきた証人であり、再び生まれ変わり再生した広島の記憶を街の中に持っていることが、どんなに平和という意味を世界中の人々に伝えるものであるかを共有し、未来につなげていくことが大切です。

二つ目は、広島で新たにどのような建築を作ることであっても、広島で建築を作ることには平和というものを世界に向けて表現することだということとを共有し、それを広島の建築設計の文化にすることです。これは広島で建築をする者にとっては、生きることの使命であると同時に建築文化として引き継ぐべき誇りであると思います。このことをこれから共有することで、広島は世界に対して平和の尊さを具体的な日常の豊かさを通じて伝えていく街になるでしょう。

この2つのことを私は「**広島の建築と街づくり憲章**」としてはどうかと思います。そのことで、広島で建築することと平和と核兵器廃絶は、私たちの街づくりそのものであることが共有されることを世界中にメッセージとして伝えることができるからです。

ひろしまのまちづくりの動き

○広島サッカー場はどこへ？

3月3日、サンフレッチェ広島の会長が旧市民球場跡地での「広島ピースメモリアルスタジアム」（仮称）計画を発表し、みなと公園に決まった場合は使用を拒否すると表明。関係者や市民に波紋を呼ぶ。

広島県、広島市、商工会議所によるサッカースタジアム建設の検討作業部会の存在意味はどうなるのか。みなと公園に建設した場合の交通混雑はハード面の対策で緩和できることと球場跡地に整備する方が80億円高くつくという検討結果を発表したが、物流業界からは猛反発が起きる。3月末には3者のトップ会談で最終決定がなされる予定であるが、サッカー場は何処へ。



サンフレ独自案
(サンフレのHPより)

これまでの経緯

市民球場移転後の跡地利用の検討については秋葉前市長時代から延々と繰り返され、結論を先送りしてきたツケが回ってきた。サッカースタジアム誘致運動以降の動きについて整理する。

- ・2012年にサンフレッチェ広島がJリーグで初優勝、2013年1月に広島市中心部へのサッカースタジアム建設を求める要望書を県、市に提出。
- ・2013年6月に広島県、広島市、広島商工会議所、県サッカー協会によるサッカースタジアム建設の検討協議会を設置し、2014年12月に検討の結果として候補地に球場跡地と広島みなと公園の2案を併記。
- ・2015年1月、検討協議会の4者のトップ会談で、県、市、商工会議所の職員による検討作業部会を設置し、15年度末までに結論を出す方向で合意。
- ・2015年7月、県、市、商工会議所のトップ会談でみなと公園を優位と判断。

コメント

サンフレ会長は球場跡地なら30億円拠出するが、みなと公園なら採算が取れないので金も出さないし、現在地に残るといふ。球場跡地は立地条件が良いので、オーナー会社のエディオ

ンは投資しても十分に元が取れると判断したもの思う。この地ならコンベンション施設やテーマパークなど多くの集客施設でも採算は取れるであろう。

しかしそれらの施設はこの地でなければならぬものだろうか。狭い敷地に目一杯のサッカー場を作っても世界から或いは県外から人が呼び込めるだろうか？ 現在地の西風新都より交通の便が良い分、多少入場者が増える程度ではないか。

原爆ドームや平和記念公園に並ぶ**オンリーワンのブランド**を作って**世界に輝ける広島**を追求すべきではないか。中央公園やその周辺を含めて全体を見直し、既存の図書館、青少年センター、こども文化科学館等の再編とともに、新たに**国際文化交流拠点機能**を加えて整備してはどうか。原爆ドームを訪れた外国人が必ず立ち寄り、広島のことや日本文化に触れ、お互いの国の理解を深め合う。もちろん国内の旅行者や広島市民にも開かれている。その交流拠点の前広場として球場跡地を活用する。

市のトップはこの地のあるべき姿を高らかに宣言して、市民を納得させる使命があるのではないか。球場跡地を候補地に残し、サッカー・ファンに過剰な期待を持たせたことが行政の怠慢ではなかったかと思う。なお、ある識者が以前から「広島広域公園の中に専用サッカー場を作るのが良い」と言っていたことを記しておきたい。 (編集委員 瀧口信二)

○都道府県対抗男子駅伝と県人会

今年21回目を迎えた天皇盃全国都道府県対抗男子駅伝は1月24日(日)、時折小雪舞う、凍てつくような寒さの中、平和記念公園→宮島口折り返しの48キロのコースで行われました。広島県チームは第1回大会以来の優勝を目指して序盤から好位置につけてトップ愛知を猛追しましたが、及ばず2位に終わりました。

都道府県対抗男子駅伝の誕生

この大会の前史があるのをご存知でしょうか？ 1931年から戦争中の中断を挟んで1995年まで、福山—広島間107キロで62回大会まで行われた中国駅伝です。元日の実業団駅伝等と並んで日本三大駅伝とも称され、当時の強豪チーム、旭化成、リッカー、カネボウなどが参加する駅伝でした。

日本陸連は京都で先行して開催していた女子の都道府県対抗駅伝の成功で、男子も、ということになり中国駅伝を主催する中国新聞にこの話が持ち込まれました。駅伝、マラソンは12月～3月初めまでの冬季に限られ、ほとんど毎週レースが組み込まれています。そのため、陸連は1月第三週の日曜日を基本に行われる「中国駅伝の発展的解消、衣替え」を打診したのです。当初、中国新聞内部では根強い反対論がありました。そのひとつは〇〇体協で出る郡市の部が消滅することでした。ただ、陸連からもし受けなければ同日開催で福岡などに持っていくと言われ、結局受け入れざるを得なかったのが真相のようです。

県人会組織

1996年の第一回まで時間がない中、中国新聞内部では紙面でのPRのほか沿道での盛り上げ、観客動員を図るアイデア出しが行われ、出てきたのが「ふるさと応援団」でした。これは広島在住の各県出身者に県人会組織を作ってもらい「おらが故郷のチームを応援しよう」ということです。前年の秋も深まるころ中国新聞が各県に問い合わせたところ、隣県の島根、鳥取のほか北海道、宮城など12道県の組織があることが分かりました。新聞社ではさらに増やそうと新聞広告を通じての呼びかけとその自治体とつながりの深い企業等(銀行、ゼネコン、自衛隊=千葉…)に協力を仰ぎ、第1回大会まで21の自治体の県人会組織が立ち上がりました。その際、「〇〇県」と染め抜いた「応援旗」30本が新聞社から寄贈されました。

その後、会を追うごとに組織化が進み第6回大会で広島を除く46都道府県の県人会組織が立ち上がりました。各県旗が林立する、それがこの大会の沿道風景の名物として今日まで続いています。因みに女子の京都では30数県に留まっているそうです。大会当日、朝10時から平和資料館前で1区から7区まで、北から南までブロックごとに全出場選手が紹介されます。選手名がコールされるごとに県旗が揺れ、「〇〇頑張れ」「〇〇ケッパレ」と声援が飛び交います。これも“県人会効果”でしょう。



スタート直前
ご当地キャラも応援



スタート前の選手紹介

ふるさとひろば

この大会のもう一つの特徴は「ふるさとひろば」です。スタート地点の道路を挟んで両サイドでの郷土料理コーナーと特産品コーナーには40の県人会が「店」を出しています。今年はことのほか寒かったこともあり北海道のホタテ姿焼き、鳥取のかに汁には長蛇の列ができていました。

富山県の事務局長を長年務める今井利行さんは「ことは雪予報もあり、観客は少ないと思いきや、鯿寿司と蒲鉾の仕入れを少なくしたが、10時過ぎには売り切れた」「間違いなくこの駅伝で県人同士のつながりが深まった」と。また岩手県チームの選手慰労会を引き受けている飲食店経営の奥芝隆さんは「もう10数年やってもらっている。このきっかけで普段でも二次会等で店を利用してもらっている」とのこと。

また、地域連携の動きもあり、北信越5県は11月に懇親会を開いているほか、北海道と九州は「北海道・九州圏人会」をつくり年二回、交流会を行っています。ことほど左様にこの大会が異郷で暮らす県人同士の絆作りに果たしている役割は大きいものがあります。

ただ、問題もあるようで今井さんは「県人会もご多分に漏れず高齢化が進んでいます。それは転勤族など若い人が入らないことです。」「今は広島で成功した方のご厚意に甘えているところがあるが、その方に何かあると組織の維持は難しいかもしれない」と。

なお、広島県チームは5年前から私が所属する奉仕団体を中心にした組織が大会終了後、選手の慰労会を開いていることを申し添えておきます。



ふるさとひろば会場



秋田のナマハゲも登場

(編集委員 三宅恭次)

○広島の復興の軌跡 (第17回) ～旧広島大学東千田キャンパス～

私が学生だった頃(昭和40年代)、広大キャンパスは東千田町、千田町、東雲町、霞町、福山市等に分散し、タコ足大学と揶揄されていた。教養部時代は東千田の本部キャンパスで過ごし、専攻学部に進むとそれぞれのキャンパスで学ぶ。市内間ならまだしも、クラブやサークル活動で福山分校との行き来には不自由を感じるが多かった。

大学紛争が激しかった頃、西条へのキャンパス移転の話が持ち上がったが、学内も周辺地域も反対する人はほとんどいなかった。しかし、広大跡地がズタズタに切り裂かれ、高層マンションが林立する今の姿を見ると、これで良かったのかと虚しさを覚える。

ここでは本部のあった東千田キャンパスに絞り、戦前からの歩みを簡単に紐解くこととする。

戦前の状況

明治35年、広島高等師範学校を東千田キャンパスに設置。東京高等師範学校に並ぶ中等教員養成機関として「教育の西の総本山」と称される。後に広大教育学部の源流となる。昭和4年には昇格して広島文理科大学が創設され、高等師範学校はその付属校となる。

その際、大学の本館として整備されたのが現在の旧理学部1号館。高等師範学校の木造の校舎や寄宿舎が建ち並ぶなか、昭和6年に部分竣工。同8年に今のヨの字型に完成し、鉄筋コンクリート造3階建て、延床面積約8,500㎡は当時としては立派な建物であった。

被爆前後の状況

1945年6月に大学本館の3分の1は中国地方総監府に接收され、師範学校の附属小学校は集団疎開をしていた。

1945年8月6日の原爆投下により、爆心地から約1.4kmにあった文理科大学及び師範学校の木造の校舎等は一瞬にして倒壊し、火災により全てを焼失。大学本館等の非木造の建物も外形は留めたが、内部は火災の延焼で全焼した。

校舎を焼失した文理科大学と高等師範学校は賀茂郡の黒瀬町に仮移転したが、焼け残った鉄筋コンクリート造校舎の応急修理をして、1946年5月に附属小学校が復帰し、1946年9月に文理科大学が本館に復帰した。



高等師範学校時代



被爆後の状況

新制広島大学誕生

戦前、総合大学は7つの帝国大学のみ。広島県には文理科大学しかなかったため、8番目の帝国大学を誘致する運動があったが、実現できなかった。戦後の教育改革のなか、大学は焼け野原の広島ではなく岡山の方へという激しい総合大学の誘致合戦があったという。

1949年5月に国立学校設置法が施行され、新制「広島大学」が誕生。大学を設立するための費用は国費ではなく、3分の1は県費で、残り3分の2は寄付金で賄われた。多くの町内会で募金活動が始まり、資金を集めるためのプロ野球の公式試合開催や宝くじ発売なども行われた。

広大発足時には文理科大学や高等師範学校を初め県内の8校に及ぶ前身学校があり、後に広島医科大学が併合された。東千田キャンパスは大学本部並びに政経学部、文学部、理学部、教育学部（一部）が設置され、後に附属小・中・高等学校と入れ替わりに皆実町から教養部が移転してくる。他の工学部は千田町、医学部は霞町、一部の教育学部は東雲町、水畜産学部と一部の教育学部は福山市。

初代学長の故森戸辰男氏は就任のために文部大臣を辞職し、開学式で建学の精神となる「自由で平和な一つの大学」の原型を示した。東千田キャンパスへの統合を推進し、平和都市広島に相応しい大学を目指す。その象徴として正門前に不死鳥の名をもつフェニックスを植え、正門から理学部1号館に至る中央通り、通称「森戸道路」を整備した。

大学紛争

1968年から69年にかけて続いた東大紛争に連鎖して広大でも正門をバリケードで封鎖し、教養部は休講状態になる。1969年5月に全共闘と学長との第1回目の団体交渉が行われ、8月には機動隊が導入され強制的に封鎖を解除した。

大学紛争の反省を踏まえ、その問題点を克服するため自主的に大学改革や東広島市への統合移転を推進した。1982年に工学部が東広島キャンパスに移転し、順次段階的に進め、1995年に全学部の移転が完了した。

東千田キャンパスの跡地利用計画

移転を期に県立がんセンター、県庁舎移転、サッカー専用スタジアム等の建設計画が上がったが、用地買収費等が折り合わず断念。

全敷地のごく一部は、広島大学の東千田キャンパスとして法学部・経済学部の夜間主コースと一部の大学院及び放送大学を設置。

森戸道路と旧理学部1号館を含むエリアは市の東千田公園となり、敷地の北側エリアは2棟の高層マンションが建っている。

敷地の南側エリアは2006年に広島地域大学長有志による「世界の知の拠点構想」が提唱されたが、高層マンションを主体にした企業グループによる「広島ナレッジシェアパーク」が2020年の完成を目指して現在建設中である。

一方、この度広島大学の東千田未来創生センターが完成し、4月から約400人の医学部1年生が東広島市から戻ってくる。統合移転した1995年以来初めての都心回帰で新たな動きが期待される。

旧理学部1号館の活用

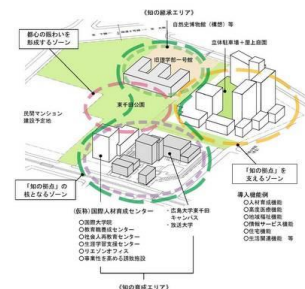
1991年に理学部の移転後、空き家のまま補修もされずに被爆建物として現在は市が管理。昨年度の耐震調査の結果「震度6で倒壊の恐れあり」と診断され、耐震補強の方法と概算工事費が示された。

今年度は建物の保存・活用方法のアイデアを市民に募り、意見を参考にして来年度に方針をまとめる予定。個人的には外壁を残し、内側に高層の校舎を建てて教養部の学び舎にする案がよい。広大生として2年間市内で過ごし、建学の精神を身につけてから各専門コースを学んで欲しい。これから増大するであろう社会人教育のためにも門戸を広げ、広大跡地を真に知の拠点として残す最後のチャンスと言えよう。

参考文献：広島大学の歴史（編集 広島大学文書館）



昭和30年代の状況



世界の知の拠点構想



ナレッジシェアパーク
(イメージ図)



旧理学部1号館の現状

(編集委員 瀧口信二)

○人物登場：石原悠一氏（アーティスト）

取材の前日まで11日間、カンボジアで子供たちとの交流活動をしてきたが、旅の疲れも見せずハツラツとした顔でインタビューに応じる。

☆ これまでの軌跡

広島に生まれ育つ。大学卒業後、高校の教員となったが心が満たされず辞職。悶々とするなか絵の世界に入る。体にハンディキャップのある人たちとの関わりから広島の特別支援教育特別専攻科を経て、県の特別支援学校教員となる。絵やライブペインティングの依頼も増え、教員生活4年間を一区切りとしてアーティストの道を選択する。

☆ アーティスト活動

各種イベントでのライブペインティングパフォーマンスや壁画制作の依頼も多く、マリーナホップの駐車場やグリーンピアせとうちのビーチ施設など多数実績あり。また子供の想像力や表現力を育みたいという思いから、子供が自由に表現できる創作活動の場を提供している。

☆ 大イノコ祭り

国の補助金により復活した大イノコ祭りは、広島市中央部商店街振興組合連合会などが2013年から11月初旬に中区の袋町公園で開いている。第1回と2回の大イノコ祭りは出演者として協力したが、昨年の第3回は総合演出という役割を担う。昨年からは補助金に頼ることなく、若手のエネルギーと経験豊富な方々が力を合わせることでやり遂げることができた。

・**大イノコで学んだこと** 地域の人との人間関係を耕すことの大事さが肌身に染み込んだ。例えるなら駄菓子屋にある割り箸についた水飴のようなもの。水飴を白くねって美味しく食べるには、力と勢いだけでは上手くいかない。温まり具合を丁寧に計りながらゆっくり根気強く力を入れ続け、徐々に柔らかくなったところで白く練っていく。祭りも同じ。

袋町公園は市民に開かれた公園であると同時に地域住民の憩いの場である。都市化した新しい祭りは、地域の人を中心にして、居住地と無関係な有志の人々がサポートする体制作りが基本。今年から袋町小学校のPTAの方も企画会議の段階から参加してもらうことになった。祭りにおける総合演出の要諦は、各人に合った「**その人が輝ける役割**」を見つけることである。そのためには互いの人となりを知るところから始まる。

・**祭りイベントの違い** 祭りは金儲けが主目的ではない。地域をまとめる有効なシステムであり、儲けの有無に関わらず**やるべきこと**である。祭りには地域の活性化、人間としての抑制からの開放・生きる喜び、自然への敬意・畏敬の念を感じさせる効果がある。やり続けることにより世代間の伝承が可能となり、相乗効果が生まれて**まちづくりの核**となりうる。

・**球場跡地で可能か** 現在は大型スポンサーがイベント会社を使って段取りをするので、地域の人との関わりが薄い。出店する人もイベントに参加する人も客でしかない。地域を耕す効果が弱く、祭りではなくその場限りのイベントで終わってしまう。

もし大イノコ祭りを市内の各団体に呼びかけて、みんなが協力できれば可能かも知れない。広い空間に大イノコのモニュメントが立ち上がれば、シンボリックで感動的なものになる。

☆ アートとは

「自分が見聞きし、学び、考えたことを心の中でろ過し出力すること」と定義。特に**思想と表現**を扱う分野。祭りにおいても、みんなの思いを整理・編集するのは思想を扱う立場であり、それを適切な方法で伝達するのは表現の分野である。大イノコ祭りでは自身が編集者であり、伝達者であると意識して振る舞った。

☆ これからの夢

将来の夢とは別だが、当面の目標としてアートの世界で有名になること。有名になれば発信力が高まり、多くの人に思いを伝えやすくなる。また、金が自分に集まれば、自己責任において子供たちや地域を耕すために使うことができる。

もっと自身の思想や表現力を高めて社会に貢献していきたいと思っている。

コメント 久しぶりに志の高い若者に会って心が洗われる気がした。是非球場跡地で新しい市民の祭りを実現して欲しい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）



略歴：1982年広島生まれ。2004年岡山理科大学卒。高校教員。2007年広島大学特別支援教育特別専攻科卒。特別支援学校教員。2011年フリー、アーティストの道へ。

○ひろしま市民ひろばの提案！

2011年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、日本建築家協会中国支部広島地域会のまちづくり委員会で検討し、ひろしまのランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめた。2013年3月に広島市に報告し、各種イベントにおける展示・発表等で多くの意見をいただき、現在見直し中である。さらに議論の場を広げるため、具体の提案内容をシリーズで紹介していきたい。

提案7. 基町高層住宅の再整備

- ・ 住環境への要求の変化が予想される基町高層住宅群を賑わい作りの資源として活用します。
- ・ ピロティ部分をマーケットや飲食空間とし、隣接する河川街へ人の流れを作ります。

基町高層住宅は、被爆からの着のみ着のままの応急的復興の中であって、いわば自然発生的に形成された住まい群に端を発している。

戦災後そして復興期の越冬のための避難施設として1815戸の公的応急住宅が建設される。更に、平和記念公園等の都市計画事業の施行により移転を余儀なくされた人たちのために土地の一時使用が認められた民間住宅も建設された。

また原爆により地方に散らばっていた人たちや外地から引き揚げてきた人たちは不法と知りながらも、雨露をしのぐために河川敷や公園用地等空いている場所に家を建て居住を始めた。1960年には、それら不法に建てられた住宅は1000戸を超えた。

このような不良住宅地区でも、住民の創意工夫をこらした生活が営まれ、特徴あるコミュニティが形成されていた。一方、老朽化や衛生面の粗悪な環境、火災の多発など生活する上で危険な状態にあった。



配置図



基町高層住宅全景

広島市はこの地区内の市営住宅用地分について1956年に公園整備を進めるとともに公園用地の一部を「一団地の住宅建設用地」として計画変更し、市営住宅を解体して中層住宅の建設を行なった。さらに他の民間住宅を含めた不良住宅についても、全面クリアランスを目指した抜本的な方策が求められた。

一方、このプロジェクトは国が積極的に支援・推進を図った。その背景には都市人口の増大、都心部の土地供給の低下、郊外へのスプロールの悪化等への対策として、より高密度かつ良質な都市居住の実現につながる高層住宅団地開発のモデルを打ち立てたいという指向があった。人口減少社会や高齢化社会に向かう今日、改めて当高層住宅団地のもつ空間的魅力を再考する。

設計者大高正人氏は、まちと住宅の連結を強く意識し、建築空間の「社会化」を計画の理念の中心に置き、住宅としての「居住性」の確保と周辺環境（中央公園、広島城）と一体となる「都市的空間」の実現を図った。

荒廃した広島町の町に様々な都市的空間（屋上庭園、ピロティ、学校、幼稚園、商店等）を備え、立体的にグルーピングされた住戸群は新しいコミュニティが誕生する期待に満ちていた。

特にオープンスペースの計画内容をみると、小学校、幼稚園、保育園、児童館、老人集会所、集会施設を都市的に解決する人工地盤や自動車道路と歩行者路の分離の他、約6mの高さを持つピロティと総延長1,400m、面積14,000㎡の屋上階庭園がまさに空間の社会化の両輪であった。

しかし、現在では、「周辺からの孤立化」、「一般市民を惹きつける吸引力が弱い」、「コミュニティ形成を期待された要素が市民に開かれていない」といった課題を抱えており、実践的で具体的な対応が急務となっている。

こうした中、広島市は「基町地区活性化計画」（2013年）を策定し、様々な取り組みに着手しているが、それらは主に団地内の居住者における取組みに重点が置かれ、居住者の変化に伴う対応が不十分なように思う。

そこで、条件型計画から課題解決型計画に視点を置き、公的住宅の枠組みを超えて、ピロティ空間及び屋上階庭園の公開（**建築空間の「社会化」の実現**）を提言する。

- ・この地区は外国に関わる人が半数近く住んでいるので、更に国際色豊かな地域づくりを積極的に推進する。ピロティでは国際バザールの開催や世界の料理が食べ歩きできる飲食街を設置。
- ・外部から屋上庭園に直接アクセスできる縦動線を設け、自由に利用可能とする。屋上は空中庭園とし、展望スペースやレストラン等を整備。夏季にはビアガーデンを開設。その他



空中庭園

*住宅地区改良事業が県と市の間で合意された時の条件として「基町に居住することによって特別な権利を与えるものではない」とされているし、事業運営面からもその家賃の設定に当たって、屋上・エレベーター・ピロティ等一般市民に開放する部分の工事費は控除していると聞く。

参考文献：代表的計画市街地・広島基町住宅地区の検証と次代への展望に関する研究（財団法人アーバンハウジング 広島大学大学院建築計画学研究室 平野義信、石垣文）（2011年）

（日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会メンバー 前岡智之）

□ほっとコーナー

『仕事の合間に温泉めぐり』

広島ウインドオーケストラ団員 米澤陽子

主人の転勤で広島→松山→岡山と移り住んではや4年が経ちます。が、出身が広島で、楽器演奏(担当は『パパからもらった〜』で有名？なクラリネット)を生業としており、私の所属が広島ウインドオーケストラというプロの吹奏楽団体なので、月に一度以上は公演などで必ず広島へ舞い戻る生活を送っております。他の都市へと移り住んだから分かることなのかも知れませんが、広島は音楽も楽しもう！という雰囲気のある街だと強く感じます。聴くだけでなく、自ら演奏される方や演奏していたという方も多くて、それだけに吹奏楽、というと「部活！」という印象も強いのだと思うのですが、「大人のデートに似合う演奏会」を掲げて自主公演も行ったりしておりますので、機会ありましたら、広島ウインドオーケストラの演奏会にも足をお運びください。



さて、好きな事を仕事に出来るのはこの上ない幸せですが、始終関わるとなるとたまには気分転換が必要です。三瓶で仕事をした折、露天風呂に連れて行って頂いて以来、温泉巡りにすっかりハマってしまいました。休日になると主人と一緒に出かけるとは、あのお湯はどうだった、こうだった、と素人なりに勝手に評価してまわっております。この文章を書きながらも、広島の温泉が懐かしくなってきました。湯来温泉・君田温泉・有福温泉・宮浜温泉… 広島周辺にも良い湯が沢山ありますね！ぜひ機会を作って、久しぶりに広島の温泉をゆっくり楽しみたいです！

○こまちなみシリーズ⑩

金沢市はまちの歴史を色濃く残した、ちょっとした町並みを「こまちなみ」として守り、育てるまちづくりを進めている。これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介してきたが、市内周辺から広島県内に対象を広げていく。

卯建（うだつ）のあるまち・玖波（大竹市）

江戸時代、安芸国の最西端の宿場として玖波村は栄えた。しかし、慶応2年（1866）、幕府軍を追撃する長州軍によって、大竹・小方そして玖波宿の殆どが焼き払われた。（第二次長州戦争）明治半ばに入り、漁業の町として、玖波谷・廿日市市からの物資の交流拠点として、海外移民者の支援などにより新たな町並みがよみがえった。

● 「馬ためしの峠」

巖島の西端を望み、大野・鳴川海岸沿いに国道2号を下る。目の前に明治12年（1879）に完成した旧国道の玖波隧道（トンネル）の入り口が見えてくる。この隧道の上を越える峠が「馬ためしの峠」と呼ばれ、トンネルが出来るまで険しい峠を越えていた。静かなトンネルを抜けると直ぐに玖波の町並みに入る。海沿いの国道2号に並行して300m家屋が立ち並ぶ。



玖波隧道、左は国道2号

● 「玖波宿うだつストリート」

現在の町並みは明治以降、長州戦争の後に再建された。白壁や格子戸だけでなく卯建を設けた家屋が多く、大火災の体験による知恵と言われている。最近では次々と洋風の家屋に建て替わっているが、卯建を構えた建物が30棟弱あり、江戸時代の宿場の雰囲気が漂い、往時を偲ばせる。この町並みは2年前、地域住民によって「玖波宿うだつストリート」と命名された。そして「まちカフェ」がオープンし、多くの手づくり市民イベントも開催されるようになった。



玖波宿の町並み
正面は馬ためしの峠

● 玖波の本陣「洪量館」（こうりょうかん）

玖波宿の本陣（大名や役人の宿）は街道筋に面し、屋敷の奥は現在の国道2号まであり、その先は海になっていた。

巖島を望む風光明媚な海辺にあり、海水を満々と湛えた海の様子から「洪量館」と名付けられた。本陣から望む瀬戸内の素晴らしさは諸国に聞こえ、文人墨客の集まる所ともなっていたが、長州戦争により全てを消失し、再建されることはなかった。

● 高札場（こうさつば）と角屋釣井（かどやつるい）

本陣の50m東に胡子神社がある。この場所に高札場（告知文の掲示場所）が設けられていた。そばに御影石の切り石で囲まれ、「角屋釣井」と呼ばれる井戸がある。海の近くであるが、豊かな真水があふれ、宿場の共同井戸の一つとして利用されていた。今でも手押しポンプでくむと冷たい真水がくみ出されるが、飲料には適さなくなっている。



高札場跡と角屋釣井

● 第67回優良公民館表彰「全国一」の玖波公民館

昨年3月、文部科学省の公民館表彰で全国最優秀館に選ばれた。同館は5年前、地域住民が学習と交流を深める講座「学びのカフェ」をスタート。参加者を「地域ジン」と呼び、地区が一体となってまちづくりを進めている点が評価された。受賞直後から全国からの視察や講演依頼が相次いでいる。同館は一人だけの常駐職員（河内ひとみさん）が切り盛り。これまで築き上げた地域の大きく太いネットワークが支える。

私が訪ねたのは今年の2月はじめ。大変多忙な中、私の質問に丁寧に答えてもらった。今後の「地域ジン・学びのカフェ」の盛り上がりに興味深く楽しんだ。河内さんは「まちが変わるのは人づくりから」「人が輝けば地域も輝く」とキッパリ。

町並み探索と合わせて貴重な収穫であった。



中国新聞（今年2月5日付）

(アクセス)

車の場合は、駐車場がないので公民館駐車場の利用許可を得ることをお勧め。館内に町並みパネル展示や「うだつストリートマップ」(無料)がある。公民館から、又はJR玖波駅から町並みまで、いずれも徒歩3分。(大竹市・玖波公民館 0827-57-7084)

参考文献:「西国街道を歩く 安芸・備後路」(西国街道ぶらり旅の会発行、2010)ほか
掲載写真:筆者撮影(28年2月5日)

(編集委員 高東博視)

○お知らせ:「時代を語り建築を語る会(第12回)」開催

- ・語り人:森保洋之氏(広島工業大学名誉教授)
- ・テーマ:宮島の町家通りにおける新たな魅力づくりと地域再生活動
- ・開催日:2016年3月17日(木) 18:30~20:30
- ・会場:合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室C(北棟5階)
(旧広島市まちづくり市民交流プラザ)
- ・会費:1000円(資料費・会場費)、学生・院生は無料
- ・参加申込の連絡先:広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX:082-223-7226 メールアドレス:nisimar5@hotmail.com
- ・主催:時代を語り建築を語る会実行委員会(代表 石丸紀興)

□編集後記

ありがとうございます。毎度ご愛読いただいています。

被爆建物の保存・活用、サッカー場、旧広島大学東千田キャンパス、基町高層団地などまちづくりの課題が並びました。これらを行政だけに任せ切りにすることはやめたいものです。若い人たちの意見、女性の意見、市民以外の方々の意見も参考にして、継続的なプログラムを持つ総合的なマスタープランづくりに市民自らが乗り出したいものです。

折しもサッカースタジアムの候補地としてサンフレッチェの経営陣から強烈的な提案がなされ、「なぜ、旧広島市民球場跡地ではいけないのか、聞かせて欲しい」とのこと。ますますシッカリとしたひろしまの将来像を構築する時期です。そのためには、課題解決型のまちづくり手法の選択が必須となります。

原爆を体験し、原爆で亡くなった人の鎮魂という意味で都市的、市民的な空地を作る。施設で何かをやるのではなく、なんにもない無の世界を表象する場面であるべき。との提案に共感します。
(編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください!**

(投稿は500字程度以内でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次	元中国放送役員